

## A-1-2

## 体育専攻学生の武道指導能力と期待する学習効果

○北村尚浩<sup>1</sup>, 川西正志<sup>1</sup>, 安道太軌<sup>2</sup>(鹿屋体育大学,<sup>2</sup>鹿屋体育大学大学院)

本研究では、体育専攻学生の武道指導能力(自己評価)と中学校で必修化される武道によって期待される学習効果(学習効果)との関連を明らかにすることを目的とした。そのため、5つの大学の体育系学部の学生を対象に、2010年10月から2010年11月にかけて所定の質問紙による配票調査を行った。配布数は1,632、回収数(率)は1,440(88.2%)であった。

質問紙によって得られたデータを数値化し、自己評価と学習効果の対応する項目毎に平均値の差を算出して比較したところ、「伝統文化の理解」「伝統文化に触れる」「武道の伝統的な考え方の理解」の伝統文化に関する3項目で学習効果よりも自己評価の方が低い値を示した。また、武道を専門とする者は、学習効果に対して自己評価の方が高く、武道を専門としない者は、伝統文化の教育についての学習効果に対して自己評価の方が低いことが明らかになった。※本研究は、平成21年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(C))「武道のグローバル化と中学校における武道教育の在り方:柔道かJUDOか」(研究課題番号:21500599)の一部である。

キーワード:武道必修化, 中学校, 体育系学部

## A-1-4

## 小学生におけるコーディネーションプログラムの有効性に関する研究

○安光達雄<sup>1</sup>, 野川春夫<sup>2</sup>(PCY, Ltd.<sup>2</sup>順天堂大学)

子どもの体力低下や二極化が問題視されている現在、学校で行う体力向上の取組が重要である。本研究では、業間中休みに短時間で行えるコーディネーションプログラムの有効性を検証し、小学生の体力向上に有用なプログラムの提案を目的とする。研究1:小学3年生(N=62名)を介入・非介入の2群に分け、4週間(計12回)のプログラムを介入群のみ行わせ、プログラム前後の反復横とび得点を比較検証した結果、交互作用が認められた( $F(1, 60)=8.15, p<.01$ )。研究2:保健室利用が顕著な小学2年生(N=46)を介入・非介入の2群に分け、研究1と同様の内容でプログラムを5週間(計9回)行い、プログラム前後の保健室利用と反復横とび得点を検証した結果、介入群は保健室利用が有意に減少( $F(1, 4)=11.29, p<.05$ )し、反復横とび得点も有意に向上( $F(1, 44)=5.48, p<.05$ )した。研究3:小学4年生(N=46)をラダーとドラウタビリティプログラムの2群に分け、4週間(計8回)行わせ、その後1週間ごと反復横とびと立ち幅とびを4週間測定した結果、両群とも有意に向上した。本研究の結果、学校で指導者が主導して行う、ゲーム感覚のできる短時間のプログラムを4週間以上かけて行うことが有効であるという結論が導かれた。

キーワード:体力向上, 体力変化, 業間中休み

## A-2-1

## スポーツタレント発掘事業に参加する受講生と保護者の期待と満足度

～受講生と保護者の相違に着目して～

○柳沼悠<sup>1</sup>, 川西正志<sup>2</sup>, 北村尚浩<sup>2</sup>(鹿屋体育大学大学院生,<sup>2</sup>鹿屋体育大学)

## I. 目的

スポーツタレント発掘事業に参加する受講生と保護者の事業に抱く期待と満足度を明らかにすること。

## II. 方法

F県立スポーツ情報科学センターで実施されているF県スポーツタレント発掘事業に参加する受講生(小学5年生～中学3年生)と保護者を対象に質問紙調査を行った。

## III. 結果

期待度に関しては、受講生、保護者ともに指導プログラムに期待を寄せており、特に「指導者の専門的な技術と知識」は項目の中で両者とも上位に位置づけられており期待が高いと考えられる。満足度に関しては、受講生、保護者ともに指導プログラムに対して高い傾向にある。平均値を比較すると、36項目中32項目で保護者の満足度が受講生より低いという有意な差が見られた。以上のことから、受講生と保護者では意識・評価の違いが明らかとなり、今後、保護者へのアプローチが必要ではないかと考えられる。

キーワード:スポーツタレント 期待 満足

## A-2-2

## 上海のプロサッカークラブの下部組織に所属する選手と保護者の満足度に関する研究

○兪東寿<sup>1</sup>, 川西正志<sup>1</sup>, 志村正子<sup>1</sup>(鹿屋体育大学)

中国の競技スポーツは、1980年代の初め頃から大活躍を遂げ、国際舞台の色々な領域で頭角を現している。しかし、見るスポーツとして最も人気のあるサッカーを他の種目に比べると「一人子政策」, 「学歴社会」などの影響で、中国のサッカー人口は毎年減少する傾向であり、ナショナルチームの成績は顕著なものとはいえない。中国のサッカー選手育成は一貫的に社会主義型の「体育学校」に依存するのの特徴であったが、90年代後半から上海を始め、中国の各強豪クラブが下部組織のサッカースクールを作ることに伴い、中国の若年サッカー選手育成は大きく違いが見られるようになってきた。中国のサッカー選手育成の新しい主流が出来た現状に合わせ、下部組織に所属する選手と保護者の満足度を明らかにすることが必要であると思われる。従って、本研究は近年社会主義型の体育学校の育成から資本主義型のプロクラブ育成への社会的変化が見られる中国で、若年選手育成の新しい主流となっているプロクラブの下部組織という環境に巻き込まれている選手と保護者の満足度を明らかにすることを主な目的とした。満足度については、上海地域のプロサッカークラブに所属する選手187人と選手たちの保護者89人を調査対象とした。その結果、2つのクラブの選手と選手、保護者と保護者の間に有意差が見られなかった反面、トレーニング環境、総合満足度、チーム・クラブロイヤリティなどの全部の項目で選手の満足度が保護者より高い傾向が見られ、両集団間には有意差が見られた。

キーワード:中国, 上海, サッカースクール